The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	宗教思想から記号論Significs へ : ビクトリア・ウェルビーの言語哲学
Author(s)	澤井, 優花
Citation	メタフュシカ. 2021, 52, p. 85-96
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/85565
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

宗教思想から記号論 Significs へ：ビクトリア・ウェルビーの言語哲学

澤井優花

１．はじめに

ビクトリア・レディ・ウェルビー（Victoria, Lady Welby, 1837 年 4 月 27 日―1912 年 3 月 29 日）は、19 世紀イギリスにおいて、独自の記号論 Significs を発展させた哲学者である。彼女の生きたヴィクトリア時代は、女性には社会的な活動よりも、もっぱら家庭で育児や夫の世話に従事することが求められた。そうした時代背景もあり、ウェルビーが大学で公式の教育を受けることは叶わなかったが、代わりに彼女はその時代の様々な人々との書簡を通し自身の批判的思考を形成した。

彼女の思想に関して特徴的なのは、その問題関心の転換である。ウェルビーが学問的研究を初めてまとまった形で出版したものとして挙げられるのは 1881 年の著作 *Links and Clues* であり、そこで論じられているのは聖典解釈という宗教的な関心である。しかし彼女は 1890 年ごろから次第に、言語の問題へと向かってゆく。彼女の言語哲学は最終的に、記号論 Significs として大成した。本稿では、1880 年から 1890 年頃までのウェルビーの研究を前期思想とし、それ以降を後期思想とする。それでは、ウェルビーの思想において、宗教的研究と言語哲学とは全く関係のないものなのだろうか。先行研究では、多くの場合ウェルビーの宗教的思想と言語哲学は関連しないとみなされているが、本稿は、前期思想が後期思想、特に記号論 Significs に与えた影響に着目する。

以下ではまず 2 節において、ウェルビーの宗教的関心に基づく前期思想の概要について解説する。そこで鍵となるのは、彼女が聖書解釈のために必要な原理であるとした「受肉の原理」というものである。続いて 3 節では、ウェルビーによる言語哲学、特に記号論 Significs についてその概要を説明する。続く 4 節では、2・3 節での議論をもとに、前期思想で論じられた「受肉の原理」が、記号論 Significs のなかに組み込まれていることについて議論する。

２．宗教的な関心、聖書解釈

本節よりウェルビーによる前期思想の内容をみる。彼女がその研究晩期に取り組んだのは、Significs と呼ばれる記号論の構築であった。しかし彼女が研究初期に関心をもっていたのは、そ

うした言語哲学的な問題ではなく、聖書解釈という宗教的な問題であった。ウェルビーは 1880 年頃、教会の制度改革に従事していた。研究の中で彼女が特に言及しているのは「新約聖書が旧約聖書の否定において成り立つものであるか、あるいは旧約聖書の拡張であるのか」という神学的問題である。

1881 年の *Links and Clues* という書籍でウェルビーは「聖書解釈の原理を定めるならば何が一番適切か？」という問題提起をし、ありそうな候補について以下のように述べる。

> 第一に、文字通りのことを語るだろう。これが端から端まで全くの失敗であるということを示すのは容易である。[1]

ウェルビーがまず挙げるのは字義通りの意味である。字義通りの意味とはすなわち、聖書に書かれた文字のそれぞれを、文字通りに解釈することで得られる意味である。しかし部分的に省略、削除された聖書の記述が理解不能となっている例をあげ、聖書を解釈するためには、字義通りの内容を考えるだけでは不十分であると述べる。次にウェルビーが解釈原理の候補として挙げるのは「等質性・水準」である。

> 第二に、等質性・水準が語られるだろう。（旧約聖書のすべての箇所は、一つの水準にあり、同じ価値を持つ。そして新約聖書のすべての箇所はそれと同じであるとみなされる）。[2]

おそらくここで述べられているのは、旧約聖書には一つのレベルがあり、新約聖書もそれと同様のレベルで書かれているということである。しかしこれについてもウェルビーは反論している。彼女によれば、新約聖書が旧約聖書よりも高いレベルにあり、旧約聖書を解釈し、拡張したものが新約聖書である。[3] よって彼女はこの原理も不十分であるとする。三番目の候補として挙げるのは文脈である。

> 第三に挙げられるのは文脈である。ここで私たちは、より真でありかつ健全な地面に着地し、より高次の原理に触れることになる。我々はそれが発生した章あるいは本全体を通し、ページに沿って目を通す際、しばしばテキストは異なって見える。しかし私たちが文脈によって解釈を行う際、限界とすべき地点、すなわち文脈がどこで終わるのか、そしてむしろどこまで文脈と並行的に探究すべきなのかを知ることはしばしば困難である。[4]

ウェルビーによれば、単に聖書の文脈といっても、一つの章の中での文脈であったり、ページ

---

1 Welby 1881: 31.
2 Welby 1881: 32.
3 Welby 1881: 33.
4 Welby 1881: 33.

単位の文脈であったり、本全体の文脈であったり、様々なスケールでの文脈がありうる。それを踏まえると、文脈がどこから始まりどこで終わるのか、また文脈にどこまで従えばよいかを決めるのは困難であり、よってこれも原理として不十分であると結論する。解釈原理の候補として彼女が最後に挙げるのは「全体性の傾向」である。

> 第四に、全体として捉えられた全体性の傾向が挙げられる。これはある意味では完全である。［……］おそらく以下の例えは適切ではない。――上等なワインの二つの瓶のうち、一つはまだ不完全で、まだ発酵していないものを想定する。その熟していない方を熟した完全なワインに注げば、全体の質を下げてしまうか、少なくともその価値を下げてしまうことになるだろう。[5]

「全体性の傾向」という言葉が意味するのは、上のワインの例からも分かるように、不完全なものと完全なもの同士の統一である。しかしウェルビーが言うには、不完全なものと完全なものを同じにしてしまえば、全体の質が下がってしまう。聖書解釈における不完全なもの、完全なものとはそれぞれ何か。キリスト教信者がしばしば旧約聖書をキリスト誕生以前の劣ったものとみなすことを踏まえると、不完全なものとは旧約聖書であり、完全なものは新約聖書である。ウェルビーはつまり、旧約聖書と新約聖書という不完全な要素と完全な要素は、統一的に解釈することができないと結論しているのである。ウェルビーが最後の原理として候補に挙げるのは「受肉の原理」である。

> そして最後に私たちは、最上の、すべてのものの中で最もキリスト的な原理、高次と低次の原理にたどり着かないのだろうか。自然界の至る所でこの原理がみられる。波を例にとれば、上向きの押し波やうねり、それに伴う引き波は、もう一つの輝かしい曲線やアーチを生み出すために不可欠なものだ。受肉の原理とは何か。それは、神と人間、高次と低次の完全な結合として表現されているのではないか。

「受肉の原理」と先に見た「全体性の傾向」との相違点は一見理解しにくい。全体性の傾向に関しては、ウェルビーは不完全な要素と完全な要素の統一が、全体の質の低下をもたらすと説明していたのだった。しかし受肉の原理に関しては、押し波と引き波が波の曲線やアーチに不可欠であるという例からも分かるように、低次の要素と高次の要素同士の完全な結合を積極的に論じている。こうした彼女の記述は神秘的な色合いが非常に強いものであるが、筆者はこの「低次の要素と高次の要素の結合」というアイデアが、のちの記号論 Significs を理解する上で重要な役割をもつものであると考える。

ウェルビーの聖書解釈についての研究を要約する。聖書解釈にとって、字義通りの意味を解釈

---

5 Welby 1881: 34.

することも、テキストにおける一つの水準を設定することも、文脈を読み取ることも、統一的に解釈をするということも不十分なのであった。ウェルビーによれば、解釈において必要なのは、低次の要素と高次の要素の完全な結合、すなわち受肉の原理なのである。ウェルビーの前期思想に関する議論は以上とし、次節においては記号論 Significs について論じる。はじめに Significs を構成する第一項 Sense と第二項 Meaning について解説する。それに続き、聖書解釈における「受肉の原理」というウェルビーのアイデアがどのようにして Significs の第三項 Significance の議論に引き継がれているかを検討する。

3．記号論 Significs について

前節ではウェルビーの前期思想について考察した。本節ではウェルビーによる記号論 Significs について説明する。彼女のいう記号論とは、言葉の意味を構成する要素を「Sense、Meaning、Significance」という三つの概念に分類する、一種の言語学的な分析である。なぜウェルビーがこのような意味の三つ組を提案することになったのか。その理由は以下の引用からうかがうことができる。

> ［……］しかし「意味」は、私たちの概念の中で最も重要なものの一つであり、全ての思考の価値が必然的に問われるものであるにもかかわらず、不思議にも私たちにとって事実上研究されていない主題である。私たちはそれを漠然と「意味」や、いわゆる同義語の長いリストによって表現された概念と同等のものとして仮定することに満足しており、それらの同義語が体現しているであろうアイデアの区別を利用しようとする試みは決してなされない。しかしそうした試みが、複雑さを解明し哲学的思考の落とし穴を回避する上で真の価値があることを示すのではないか。[6]

ウェルビーの問題意識は、「意味」というものが重要な哲学的テーマであるにも関わらずそれがいまだ探求されていないこと、また意味というものが単にその同義語（purport, reference, acceptation, bearing, indication, implication, sense, effect, importance など）のリストで表現されているものの、それらのうちで区別がなされていないことにある。

また彼女による研究が当時の言語学研究とどのように差異化されていたのかということについては、以下の手紙が参考となる。

> 特に私は「意味」の問題を、その変化や発展（これは専門としての文献学に属する）の問題を超えて、その関係における性質の分析に持ち込もうとしているので、私の長く困難な調査の結果は、当然簡単に表現できるようなものではないとご理解いただけると思います。（ウェルビーからブレアルへの手紙　1903 年 2 月 25 日）[7]

---

6 Welby 1896: 430

7 Petrilli 2009: 306.

手紙の相手は、フランスの言語学者ミシェル・ブレアル（Michel Bréal, 1832-1915）である。ブレアルは比較言語学の研究者であり、言葉の意味の変化を研究対象としていた。また彼の研究手法は、古いテキストを通時的に分析するという文献学的手法であった。上の手紙でウェルビーは、自分の研究はブレアルのしたような文献学的な意味の探究を越えて、意味がもつ性質やその関係についてより形式的に分析を行うものであると宣言しているのである。

以上を踏まえ、ウェルビーの問題意識や研究目的を整理する。まずウェルビーは、意味という主題が哲学において取り扱われていないこと、また「意味 meaning」というものが様々な同義語によって表現されているものの、その中に区別が見出されていないことについて問題意識を持っていた。さらに彼女の研究の意図するところは、言語学（当時の文献学）で扱われる通時的な手法を越えて、意味というものの性質やその関係についてより一般的な枠組を与えるというものであった。以下では彼女が提案した Significs を構成する三項について解説する。説明の都合上、先に Sense と Meaning について論じ、続く節で Significance について説明する。

３－１．Sense, Meaning

彼女が三項の一つ目として挙げるのは Sense であり、以下のように定義する。

> (a) これらのうちの一つ目は、当然のことながら、最も原始的な意味での「感覚」と関連しているだろう。つまり、環境に対する有機的な反応や、すべての経験における本質的に表現的な要素と関連している。私たちは言葉の中で無意味なものを排除し、ある言葉が使われたり、ある発言が正当化されたりするのは「どのような意味で」なのかを問う。[8]

上の引用からわかるのは、Sense には⑴環境に対する有機的な反応、⑵経験における本質的に表現的な要素、という二つの特徴づけがなされているということだ。以下ではこの二つの特徴づけの内容を整理するため、関連する記述を順に見ることとする。まず、1 の環境に対する有機的な反応とは、ウェルビーが以下で述べるようなものである。

> 解釈の機能がどこから始まるのかという問題、つまりどのようなものであれ、刺激がそれ自体とは別のものを直接的に示したり、示唆したり、際立たせたりすると言われているところは、すでにある程度、意味の問題、すなわち私たちがその言葉を使う際の解釈の問題が生じている。ある意味で生物が第一にすべきことは、植物から始まっても、刺激を解釈し、例えば食べ物と危険の信号を区別することだろう。[9]

彼女によれば、ある外部からの刺激が食べ物や危険の信号となっているのならば、それを受け取るのがいかなる原始的動物であれ、そこには既に意味の問題がある。そしてまた、外部からの

---

8 Welby 1911a: 79.

9 Welby 1896: 24-25.

刺激へ反応することそれ自体が解釈の営みなのである。Sense の⑴環境に対する有機的な反応という特徴づけは、言葉の意味を構成する要素のうちの、このような刺激への反応、より適切には、そうした反応によって得られる感覚情報を指すものであると考えられる。

それでは Sense における⑵経験における本質的に表現的な要素とはいかなるものか。そしてまた、Sense における⑴環境に対する有機的な反応、⑵経験における本質的に表現的な要素という二つの側面はどのように関係しているのか。これについてウェルビーの先行研究者シュミッツは、ウェルビーによる「言語的なもの」と「感覚的なもの」の区別が重要であると述べる（Schmitz; 1985）。以下は彼が引用したウェルビーの記述である。

> 言語的（verbal）なものは、実際に使用されているのではないもの、つまり記号的な道具の問題であり、感覚的（sensal）なものは、特定の機会において伝達される価値の問題である。この二つは現在のところ絶望的に混同されている。しかし実際に使用されている言葉には、単に言語的なものではなく、そこには感覚的なものが含まれている。[10]

上の引用から分かるように、ここで述べられている「言語的なもの」とは記号的な道具としての言語であり、「感覚的なもの」とは特定の状態で伝達される価値としての言語である。

ここで考えられるのは、ウェルビーが Sense について定めた⑴環境に対する有機的な反応、⑵経験における本質的に表現的な要素という二つの特徴づけが、おおむね上の引用で述べられた「感覚的なもの / 言語的なもの」の区別に対応しているということである。「感覚的なもの」には Sense の定義の⑴環境に対する有機的な反応（＝感覚的情報）が対応し、「言語的なもの」には⑵経験における表現的な要素が対応している。ウェルビーは言語的なものを純粋に記号的な道具であるとしているが、これについてはアルファベットや数字、「りんご」という文字列などを想像すればよいだろう。

そして上の引用で注目すべきは、感覚的なものと言語的なものとは混同されており、（それは一見問題にも思えるのだが）、実際には言語的なものと感覚的なものという二つの要素を切り離すことはできないという点である。このことは以下の引用においても述べられる。

> 誰かが庭へやって来て、全く奇妙な何かを報告したとする。私たちは、それがどのような感覚において（あるいはどのような感覚によって）知覚されたのだろうか、と問うかもしれない。視覚で？聴覚で？嗅覚で？触覚で？といったふうに。そしてこの報告を受けた私たちの行動は、おそらくこの答えに依存するだろう。（ウェルビーからデイヴィッドへの手紙 1903 年 1 月 20 日）[11]

---

[10] Welby 1911b: 79.

[11] Schmitz 1895: 104.

上の引用でウェルビーが主張しているのは、言葉（ここでは報告）の意味は、それを私たちが特定の状況において、それをどのような感覚器官を通じて受け取ったのかということに依存するということである。別の言い方をすれば、特定の状況を持ち、かつ実際に使用されている言語以外はありえないということである。以上を踏まえ、Sense という概念の内容は以下のように要約できる。

1. Sense とは⑴環境に対する有機的な反応、⑵経験における表現的な要素、という二つの側面から説明される概念である。
2. ⑴環境に対する有機的な反応とは、生物が外部の刺激をなんらかの記号（食べ物 / 危険など）として解釈すること、さらにそうした解釈から得られる感覚的情報を指す。
3. 一方、⑵経験における表現的な要素とは（ウェルビーによる「感覚的なもの / 言語的なもの」の区別を踏まえると）純粋に記号的なもの、すなわちアルファベットや数字、単語の文字列等を指す。

そして⑴環境に対する有機的な反応、⑵経験における表現的な要素という二つの要素は切り離すことができない。ウェルビーによれば言語とは特定の状況で実際に使用されるほかなく、特定の状況で使用される言語は何らかの感覚器官を通じて解釈される。よって言語の意味は、その記号的な側面から理解されるだけでなく、ある程度感覚的な側面を踏まえて理解されることになる。Sense という概念から、ウェルビーが言葉の解釈という問題に関していかに感覚的側面を重視していたかがうかがえる。

Sense に関する議論は以上にして、ウェルビーが二つ目に挙げる Meaning について解説する。これはすなわち話し手のもつ意図を指す概念であり、Sense に比べて簡潔に定義されている。

> (b) しかし Sense はそれ自体目的的ではない。一方で Meaning は伝えようと意図された特定の意味のために適切に確保されている。[12]

> ある声明の Sense は、というよりむしろある声明がなされる際の Sense（これは Significs にとって重要な違いである）は私が想像するに、意図のように目的をもって伝えられる場合もあるかもしれないか、それは意図とは異なり、無意識のうちに不本意ながら示唆されるものであるかもしれない。［……］言葉の Meaning とは、伝えようとされている意図――使用者の意図なのである。[13]

上の引用から、まず Sense 概念が不本意に、意図せず伝達されてしまう内容であるということ

[12] Welby 1911a: 79.
[13] Welby 1903: 5

が分かる。また Meaning とは、話し手の意図を指す概念であり、その点で目的的である。

３－２．Significance

これまでウェルビーによる記号論 Significs を構成する第一項 Sense と第二項 Meaning について説明した。続いてウェルビーが挙げるのは Significance であり、これは以下のように定義されている。

> （c）Sense と Meaning を含みながらも、それらを超越した範囲で、ある出来事や経験の広範囲に及ぶ結果、暗示、最終的な結果、成果を包含するものとして Significance という言葉が有用に適用される。[14]

> Significance は常に多様であり、その重要性、私たちへの訴え、感情的な力、理想的な価値、道徳的な側面、その普遍的または少なくとも社会的な範囲を表現することによって、その Meaning だけでなく、その Sense をも強める。[15]

上の引用から、Significance とは、これまで説明してきた Sense や Meaning といった概念を含み、かつそれらを超越した範囲にある概念であるということが読み取れる。そしてその超越した範囲には、（おそらく言語使用に伴う）出来事や経験の結果や暗示などが含まれている。そして Significance は、三項関係における他の項、すなわち Meaning や Sense を強める作用をもつ。

しかしこれだけでは、Sense や Meaning に比べ、Significance の内容があまりに漠然としている。ここまでの議論で注目すべきは、Significance だけが Sense や Meaning といった他の項とは異なる類の概念であるということである。それでは Significance とは一体何なのだろう。これを理解するには、Significance を、先に見た前期思想と紐つけて解釈しなければならない。

４．前期思想と後期思想を結ぶ

前節までの議論を確認する。まずウェルビーの記号論 Significs とは、Sense、Meaning、Significance の三項関係によって与えられるものである。そしてこれら概念の三つ組は、言葉を解釈するための枠組みとして捉えられる。一項目の Sense とは言葉の意味を受け取るうえでの感覚的情報を指す概念であり、二項目の Meaning は話し手の側の意図を指す概念であった。そして三項目の Significance は、Sense や Meaning といったものを包含しつつ、言語に伴う何らかの示唆を与えたり、それらの項を強めたりする概念であった。しかし前節でも見たように、Significance の内容についてはいまだ不明瞭である。本節では Significance という概念の内容をより詳細に理解するため、この概念と前期思想の関連に焦点をおく。具体的には、Significance が前期思想で語られた「受肉の原理」と同様の働きをもつことについて論じる。前節に続き、

---

[14] Welby 1911a: 79.

[15] Welby 1903: 6.

Significance に関する引用を見る。

> 全ての人種、全ての種類の人々は、最も低い等級である Sense のもとで、そして高い等級である Meaning のもとで、そして最も高次の等級である Significance のもとで出会うことができる。[16]

記述の具体的内容については深入りしないが、ここでは全ての人々にとって、Sense が最も低次のもの、Meaning が次に高次のもの、Significance が最も高次なものとして順序付けがなされている。続いて以下の引用では、「低次」「高次」というキーワードが用いられている。

> あるものは、それが単純な記号や絵画的なシンボル、あるいは何かを代理するような行為によって表現可能である限りにおいて、それは低次の意味においても高次の意味においても significant なのである。[17]

ここで論じられているのは、何かが significant であるということ、（先の記号論での Significance の働きを踏まえれば、）ある言葉や発話が何らかの結果や含意をもつことについてである。ウェルビーによれば、何かが Significant であるというのは、「低次の意味」と「高次の意味」の両方において Significant なのである。

上記の引用を踏まえれば、これまで論じた三項関係は〈Sense ＜ Meaning ＜ Significance〉の順で位付けすることができる。また三項関係それぞれの概念の特徴から、Sense や Meaning が感覚情報や話し手の意図といった具体的な内容を持つのに対し、Significance だけが、その他二つの概念を包含するという、ある種の法則のようなものとして設定されている。さらに言うと、Significance とは「低次のもの」＝ Sense と、「高次のもの」＝ Meaning を含み、強め、それにより結果や含意をもたらすような法則なのである。

単純な例を考える。例えばＡさんがＢさんの家にやってきて話していた時に、Ｂさんが「お腹すいた」と言う場合を考える。Ｂさんはまさに「お腹が空いた」ことをＡに伝えようと意図しているが、Ａさんは外が暗くなっていることに気が付いた。それでＡさんは、Ｂさんが意図していないにも関わらず、「時間も遅くなったしそろそろ家に帰るほうがいい」と思い、帰宅することを決める。この例では、Ｂさんが本来意図した内容（空腹である）＝ Meaning と、Ａさんが受け取った、外が暗いという視覚的（感覚的）な情報＝ Sense が組み合わさることで、結果的にＡは「早く帰らないといけない」という内容をＢから受け取った。こうした誤解も、ウェルビーの記号論という枠組内では Significance という法則によって導かれた結果・含意として理解できる。

以上より、Significance がある種の法則であるということを確認した。それを踏まえ前期思想を振り返ると、Significance と非常に類似した機能をもつ原理が思い浮かぶ。それはすなわち、

---

16 Welby 1903: 165.

17 Welby 1903: 150.

受肉の原理である。既に挙げた引用を再掲する。

> そして最後に私たちは、最上の、すべてのものの中で最もキリスト的な原理、高次と低次の原理にたどり着かないのだろうか。自然界の至る所でこの原理がみられる。波を例にとれば、上向きの押し波やうねり、それに伴う引き波は、もう一つの輝かしい曲線やアーチを生み出すために不可欠なものだ。受肉の原理とは何か。それは、神と人間、高次と低次の完全な結合として表現されているのではないか。

受肉の原理とは、ウェルビーによれば高次と低次の完全な結合をもたらす原理なのであった。ここでは高次のものとして神が、低次のものとして人間があげられているが、それら二つの要素が何らかの仕方で結合することによって、ついには神の言葉、すなわち聖書の記述の解釈にたどり着くことができるのである。「受肉の原理」が最終的に聖書の解釈をもたらすという過程は、Significs における Significance が、低次の要素と高次の要素に対し、それらを包含したり強めたりすることで、言語に付随する何らかの結果や含意をもたらす過程と同様のものと言える。以上より、受肉の原理は Significance に形を変えて後期思想に引き継がれたとみることができる。

5．おわりに

本稿の目的は、ヴィクトリア・ウェルビーの前期思想と後期思想の関連を検討することであった。2 節では彼女の前期思想である宗教的研究、すなわち聖書解釈に関する議論を整理した。そこでは、ウェルビーが聖書解釈の原理の中で唯一有効なものとして「受肉の原理」を主張していたということが明らかとなった。続く 3 節では彼女の後期思想である記号論 Significs の内容を整理した。記号論を構成するのは三つ組の概念である。そのうち一つ目の Sense とは感覚情報を、二つ目の Meaning は話し手の意図を指す概念である。残る Significance は Sense と Meaning を包含し、結果や含蓄をもたらす法則として作用する概念であった。4 節では 2・3 節での議論を踏まえ、Significance と受肉の原理が類似した働きを持つこと、また受肉の原理が Significance として彼女の記号論に引き継がれていることを見た。

聖書というテキストに含まれる神と人間という二つの要素を結合することで聖書解釈をもたらす受肉の原理と、聞き手の感覚情報（Sense）と話し手の意図（Meaning）を包含し言語にその結果や含意をもたらす概念 Significance とが類似しているという本稿の主張は、聖書解釈という営みと言語的なコミュニケーションの関連に示唆を与えるものである。また現代の言語哲学や言語学、特に語用論の分野でほとんど当たり前の前提となっている「話し手・聞き手からなるコミュニケーション」という見方が、20 世紀以前に、ウェルビーの哲学において既にみられていたということも、哲学史的に重要な論点である。本稿ではこれらについて十分な議論をすることはできなかったが、今後の課題となるだろう。

（さわいゆうか　哲学・思想文化学）

参考文献

Petrilli, Susan. (2009). Signifying and Understanding. Reading the Works of Victoria Welby and the Signifying Movement. Berlin & New York: Mouton de Gruyter.

Schmitz, H. Walter. (1985). Victoria Lady Welby's Significs: The Origin of the Signific Movement. In Welby, V. (1985 [1911]). Significs and language. The articulate form of our expressive and interpretative resources. Amsterdam: John Benjamin's.

Welby, Victoria. (1881). Links and Clues. In Susan Petrilli (2009). Signifying and Understanding. Reading the Works of Victoria Welby and the Signifying Movement. Berlin & New York: Mouton de Gruyter.

Welby, Victoria. (1896). Sense Meaning Interpretation. In Susan Petrilli (2009). Signifying and Understanding. Reading the Works of Victoria Welby and the Signifying Movement. Berlin & New York: Mouton de Gruyter.

Welby, V. 1903. What Is Meaning? Studies in the Development of Significance. London: Macmillan.

Welby, V. 1911a. Significs and Language: The Articulate Form of Our Expressive and Interpretative Resources. London: Macmillan & Co.

Welby, V. 1911b. Significs. In Encyclopaedia Britannica, 11th edition, vol. XXV, 78–81. Cambridge: Cambridge University Press. In Charles Hardwick 1977, 167–175. Now in Susan Petrilli 2009, 345–350.

Welby,V, and Charles S. Peirce. (1977 Semiotic and Significs. The Correspondence between Charles S. Peirce and Victoria Welby. Pref., intro., and ed. C. S. Hardwick (with the assistance of J. Cook). Bloomington/London: Indiana University Press. [Referred to as Hardwick, 1977.]

From Religious Thought to “Significs” : Victoria Welby’s Philosophy of Language

Yuka Sawai

This paper looks at the philosophy of Victoria Welby, attempting to make connections between her early and later thought. Victoria Welby (1837-1912) was a 19th-century British philosopher who, in the later years of her career, proposed her own semiotic theory, Significs. There are echoes of contemporary philosophy of language in her semiotics, focusing on the relationship between speaker and listener in communication. However, she had not originally studied philosophy of language. At the beginning of her studies, Welby was interested in the religious question of how to interpret the Bible. Previous studies have not focused on the relationship between her religious interests and her semiotics, but is this really the case?

For the purposes of this paper, we will refer to her work from about 1880 to 1890, based on religious concerns, as early thought, and to her philosophy of language, including semiotics, after 1890 as the later thought. We will then examine the possibility that they are related and that the early thought has been carried over into the later thought.

In section 2 we summarize Welby’s work on biblical interpretation. It explains the function of the “incarnation principle” as a principle that makes biblical interpretation possible. In section 3 we will look at the outline of Significs. In this section, the three concepts that make up her semiotics are explained in turn. The first concept Sense refers to the sensory information of the listener, the second concept Meaning refers to the intention of the speaker, and the third concept Significance is explained as the law that combines them. On the basis of the discussion in sections 2 and 3, we will examine in section 4 how the incarnation principle described in the early thought is inherited in the form of Significance, a concept that constitutes the later thought of semiotics.

「キーワード」
ウェルビー　記号論　聖書解釈　Significs